特集3｜ホスピタリティに見るデザイン

8

# DESIGNING FOR HOSPITALITY

## ホテルのインテリア

### 雲仙観光ホテル｜Unzen Kanko Hotel

昭和10年10月10日、「雲仙観光ホテル」は国立公園第一号の指定を受けた風光明媚な温泉地・雲仙にオープンした。スイスの山小屋風の外観を持つ建物は、竹中工務店の設計・施工のホテル第一号だった。担当は早良俊夫。当時、大阪本店で藤井厚二らと設計部の草創期を牽引した俊才。創業時は東洋美と西洋美を兼ね備えた豪華絢爛なホテルとして、上海航路で避暑に来る欧米人を魅了したと伝えられている。自然と調和したクラシックな建物は、今なお変わらぬ姿で客を迎えている。

平成16年から5期にわたる大改修は"新しくノスタルジア"をテーマに当時の雰囲気を残しながら、時代のニーズを取り入れた空間を追求した。石畳みのアプローチ、ウィリアム・モリス調にまとめられた客室、そして復元された図書室、撞球室など、ノスタルジアを彷彿とさせる新デザインだ。

平成15年、国の登録有形文化財に記され、平成22年には、開業75周年を迎えた。"古き良きもの"を大切にするだけではなく、時代の新しさを加味するのがホスピタリティだ。オーナーのスピリッツは"まずは100年"……。その心意気が伝わってくる。

ロビー

「雲仙観光ホテル」は、ハーフティンバーの特徴的な外観のためか、建物すべてが木造というイメージが強い。しかし実際は、本館1階は鉄筋コンクリート造、2階と3階が木造のいわゆる混構造にあたる。つまり木を効果的に使うことによって、コンクリートの持つ無機質で固いイメージを意図的に排除していると言える。約200畳の無柱空間を擁するダイニングルームを例にとれば、仕上げ材に木を有効に使い、鉄筋コンクリート造のイメージが強調されないよう配慮されているのがよく分かる。

ホテルを訪れると、最初に目にする外観に限らず、インテリアにおいてもパブリックスペースからプライベートスペースにまで、木部の露出が絶えないことに気づくだろう。前述のダイニングルームは言うに及ばず、車寄せからレセプションデスクに至るまでには、すでにその独特の雰囲気をふんだんに味わえる。ロビー、バー、図書室、撞球室などもその期待を裏切らない。特に中央の階段は、このホテルの歴史や特徴を物語るには格好の容姿を提供してくれている。昭和36年に昭和天皇皇后両陛下がご宿泊された特別室を始め、各客室においてもデザインの差こそあれ同様である。

木部の表情は色も肌触りも種々雑多で、昭和10年創建当時の職人が、競うように表現したのではないかと思わせる新(ちょうな)による“なぐり仕上げ”もあれば、丸太材をそのまま仕上げに使ったものまで多岐にわたる。それらの特徴は、彫刻的な細密さや緻密さではない。剛胆かつ骨太、忌憚なく言えば無骨といってもよく、ねじれや割れ、ものによっては裂けているものでさえ、良くも悪しくも「雲仙観光ホテル」の最大の特徴であり、独特の雰囲気を醸し出す源泉となっている。過去数度に及ぶ改修工事においてもそれらは失われることはなく、ホテルの生き証人のごとく連綿とその存在を誇示し続けている。それはすなわち、これら木の持つ表現力こそが、「雲仙観光ホテル」を「雲仙観光ホテル」たらしめるものであるという左証であり、多くの旅人が魅了され、ここを訪れる理由のひとつでもある。

創建時の広告にはスイスの山小屋風云々…とあるように、当時からすでに「雲仙観光ホテル」の建物としてのイメージは決定されており、そして75年を経た今もなお、そのイメージそのものなのである。このイメージが大切に守られていることこそが、「雲仙観光ホテル」を訪れる人にとって何よりも代え難いホスピタリティのひとつになるのだと言えるのかもしれない。

# DESIGNER'S COMMENT

## デザイナーズ・コメント｜変わらないこと、変えないことで生まれるホスピタリティ

中嶋 亨｜NAKAJIMA Toru

なかじま・とおる——スタヂオ106一級建築士事務所代表／1987年、京都工芸繊維大学建築学科卒業。
Mario Bellini Associati（イタリア）、国内建設会社を経て、2001年より、スタヂオ106一級建築士事務所代表。
主な仕事：IST本社・研究所、軽井沢Sなど。

1

2

3

4

5

6

1——正面外観：スイスの山小屋を思わせるハーフティンバーの外観が、周囲の自然と調和してノスタルジックだ。石畳みのアプローチは、平成20年の改修時に手作業で敷き詰められた
2——真鍮のドアノブ：温泉の硫黄で黒ずまないよう、スタッフが毎日欠かさず磨き続けている
3——正面階段：新仕上げによる装飾が空間全体を柔らかな雰囲気で包み込んでいる
4——バー：落ち着いた雰囲気を醸し出すテーブル&チェア｜5——床タイル：創業当時のタイルを少しずつ補修しながら組み合わせている。一つひとつ手焼きされているため、同じものがない
6——温泉浴室：ドーム型の天井、ステンドグラスなどが、大浴場とは思えない優雅な空間を演出している

7

8

9

10

11

7——ダイニングルーム：5mの高い天井と約200畳のゆったりとした空間。木の化粧梁が温かみのある印象を与えている。木の床板はほとんどが創業当時のまま
8——穏やか雰囲気を演出するさまざまな布地を張ったパーティション
9——レトロなアンティークの照明など、至るところにノスタルジックな調度品が飾られている
10——図書室：客から寄贈された書籍を始め、文学全集や写真集など、1,500冊以上が並ぶ。木部には数種類のなぐり仕上げが施されている
11——撞球室：ステンドグラスやハイバックのチェアがロマンチックな雰囲気を漂わせている

「雲仙観光ホテル」は、“新しくノスタルジア”をテーマに、平成16年から5期にわたる大リニューアルを実施いたしました。昭和10年の創業時は、「東洋と西洋の世界美が融合した豪華絢爛なホテルと、外国の使節団をうならせた」と言い伝えられ、オーナーを始め、私ども従業員は、その当時の感性を損なうことなく次代に継承することを常に心がけております。真鍮のドアノブひとつにしても、温泉特有の硫黄から守るために、毎日丹念に75年間、磨き続けてまいりました。

今回の改修ではテーマに沿って、建設当時のノスタルジックな雰囲気をごく自然に取り戻しながら、そこに新しい現代の風を吹き込んだところがポイントでございます。例えば、創業当時にございました図書室、映写室、撞球室をホテルの雰囲気に合わせて再現し、設備系統、水まわりなどは現代風に手を入れました。その他、玄関アプローチをピンコロ石でペーブし、より雰囲気のある並木道に刷新いたしました。その奥に見える木造と溶岩石を組み合わせたホテルの外観は、周囲の緑に包まれた山小屋風の印象をさらに盛り上げています。また、ダイニングにファンを取り付けたり、客室内部をウィリアム・モリスの壁紙で張り替えたことを始め、取り立てて変わったという印象を与えるのではなく、いつの間にか馴染んでしまう温もりを新たに演出したところが、“新しくノスタルジア”の妙味でございます。お客さまをご案内すると「昔からこうだったでしょう?」というお声が返ってきて、うれしい限りでございます。また、ウィリアム・モリス調で統一された客室は評判も良く、洗練された高級感と親しみやすさが相まって、骨太な木造の建物をより印象深いものにしているようでございます。

当ホテルは、チェックインから“24時間滞在”のスタイルも取り入れておりますので、お気に入りの場所で、思う存分ホテルライフをお過ごしいただく…、というよりもお暮らしいただく感覚で親しんでいただきたいと願っております。中には親子3代にわたってご利用いただいているお客さまもいらっしゃいますし、毎年のようにいらしていただく方も多く、「お帰りなさいませ」とお出迎えし、「ただいま」とおっしゃっていただくのは無上の喜びでございます。平成15年、国の登録有形文化財に記され、平成22年には開業75周年を迎えました。次の100周年に向かって、日々、精進しております。

[建築概要]
名称:雲仙観光ホテル
所在地:長崎県雲仙市小浜町雲仙320
敷地面積:10,706.20m² | 建築面積:2,242.42m² | 延床面積:4,906.77m² | 客室数:44室 | 開業:1935年 | 改修:2004年
ホームページ:http://www.unzenkankohotel.com/
設計:竹中工務店 | 改修:スタヂオ106一級建築士事務所

# HOTEL'S COMMENT

## ホテルズ・コメント | “新しくノスタルジア”をテーマに…

本田達也 | Tatsuya Honda
ほんだ・たつや——雲仙観光ホテル 宿泊課支配人

12

13 14 15 16 17

12——特別室:本館正面に位置する「雲仙観光ホテル」の象徴的客室。雰囲気は創建当時のままである
13——創建時からの照明器具:手づくりのため荒削りで、微妙に歪んでいるのが微笑ましい
14——木製の上げ下げ窓:本館客室では今もって現役
15——小窓のちょっとしたところにもなぐり仕上げが施されている
16——入り口正面の壁:簡素かつ厳かな雰囲気をたたえている | 17——同寝室:化粧梁も照明器具もオリジナルのまま今日まで使われ続けている

18

19 20 21 22 23

18——ラグジュアリーツイン:「雲仙観光ホテル」のイメージを最も身近に感じることのできる客室。木の表情も多種多様である
19——特別室浴室:ほとんどの客室で猫足型のバスタブを採用している
20——オリエンタルツイン:格子の引き戸で仕切られた客室は、和洋折衷では割り切れない不思議な雰囲気を醸し出している
21——各客室に置かれたアンティーク調のスタンドライト:客室の雰囲気を一層引き立てている
22——客室扉と姿見:扉上部の欄間は空調機がない時代の名残りである。往時は食事を知らせるベルの音もここからダイレクトに聞こえただろう | 23——小物にもデザインの統一感が感じられる